

〔研究ノート〕

「石井利延像」「石井利昌像」について

大和文華館には、「双柏文庫」と呼ばれる古文書群があります。双柏文庫の作品はもと、日本中世史の研究であった中村直勝氏の収集したものでした。近畿日本鉄道の元社長であり大和文華館の理事長を務めていた佐伯勇氏が中村氏の教え子であった縁により、1973年に当館に寄贈されました。双柏文庫の中心は日本中世史の古文書ですが、なかには肖像画が二点含まれています。それぞれ、「石井利延像」(図1)「石井利昌像」(図2)と呼ばれています。作品の上部にはいずれも賛が認められており、像主の人物とともに興味深い内容を伝えています。本稿では、両作品の賛を読み解きながら、この作品二点が提起する問題を整理しておきたいと思います。

「利延像」の賛にはわかりにくい部分もありますが、おおむね以下のような内容が記されています。この肖像画の像主は、法名は「実際軒甫真葆空居士」、姓は宇治、名を利延、家号を石井

といい、京都の人でした。幼い頃から東寺の勸智院で学び、30歳頃から九条幸家(1586~1665)に仕えました。幸家に命じられ、幸家の息子である道房(1609~1647)の伝記の作成を任せられたようです。賛文ではこの後に道房の叙任のことが記されたうえで、利延の本姓は平氏で織田有楽斎の玄孫であったが、道房が石井家を継がせたこととあります。そして、寛文十一年(1671)の秋に道房夫人の廉貞院(1618~1671)が没したのを契機に剃髪し、天和三年(1683)の夏に81才でなくなりしました。4人の九条家当主に50年余りにわたって仕え、倦むことなく働いたと称えられています。この肖像画は利延の冥福を祈る目的で制作され、東福寺の塔頭のひとつである大機院に納められたようです。賛文末尾の日付より、利延が没してから10年後の元禄六年(1693)の作と判断されます。

「利延像」が納められたと見られる大機院は、九条家とも縁の深い寺院です。

室町時代に九条満家(1394~1449)が創建し、正保二年(1645)に道房によって再興されました(『京都坊目誌』下京第三十一学区之部、1916年)。「利延像」の賛に、九条道房の役職の記述も盛り込まれているのは、利延が道房ら九条家当主に長年仕えた功績を称えるだけではなく、大機院に納めることも考慮されていたためだと思われます。

続いて「利昌像」の賛も見てみます。はじめに像主の法名と名を「紫嶽院恵照智雲居士 宇治利昌」と記し、やはり本来は平氏の出であり、藤家に重んぜられたとしています。藤家とは藤原氏出身の兼実(1149~1207)に始まる九条家を指し、利昌もやはり九条家に仕えていたと思われる。利昌と利延との関係性は不明ですが、いずれも姓が宇治である点、名に共通して「利」の字が入っている点などから、親子あるいは親族であったと推測されます。賛では続いて、利昌の人徳を称える言葉と、子孫の繁栄を祈念する文言があり、「利昌像」の制作経緯が記されます。利昌が亡くなったのは宝永六年(1709)であり、三十三回忌に当たる年に息子の利寛が肖像画を作って供養しました。賛の日付は寛保元年(1741)で、署名には「前東福碧天守沼」と記されています。碧天守沼(1667~1748)は第256代東福寺住職で、その塔所は大機院でした(『東福寺誌』1930年)。

本稿の最後に、両肖像画の顔貌描写に触れておきたいと思います。「利延像」(図3)は、肉身部の輪郭を墨線ではなく朱色がかった線で描き、額や目、口の周辺には皴を同様の線で描き込

みます。目も類似の線によって描き出しますが、上まぶたと瞳には濃墨を用いています。眉は墨線で一本一本の毛を描き、立体的に表現されています。唇は輪郭をとったうえで赤色を塗り、上唇と下唇の境を淡墨線で表わします。また、唇の両端には墨線を引いて、わずかに下がる口角を表します。さらに、皴の周辺や窪んだ部分には淡く色が塗られ、顔に立体感を与えています。利延像の顔貌描写は写実性が高く、像主の面影を生々しく伝えているように感じさせます。

一方、「利昌像」(図4)の場合は、皴の表現や眉の毛描きなどは行われておらず、単純化された顔貌描写となっています。しかし、目や鼻や頬、耳の辺りにごく薄く施された赤いほかしや、輪郭や鼻梁を表す墨線に重ねるように薄い朱線を引く表現はこなれており、絵師が肖像画制作に慣れていた様子を示しています。「利延像」と作風は異なりますが、顔を表すために丁寧に引かれた線を見るに、極端に手の落ちる作品ではないと思われます。

東福寺には、精緻な顔貌描写が行われた中世の禅僧肖像画がいくつも所蔵されています。ここで紹介した両作品の技法が直接的に中世の肖像画に結びつかけではありませんが、わずかとはいえ東福寺と関係を有する作品が、それなりに優れた技量を有する絵師によって制作された点は興味をそそります。また、利延と利昌が近い関係にあったという仮定が正しいならば、全く系統の異なる絵師が制作にあたった点は疑問に感じられます。江戸時代の京都における肖像画制作のありようと合わせて検討していく必要があると考えています。(仁方越洪輝)



図1



図2



図3



図4